

「予定外」を楽しむ

早稲田大学大学院国際関係学専攻

ラクスミワタナ モトキ

思えば私の学部卒業後の十年ほどの時間は「予定外」の連続であると、ふと思った。

2015 年、私はタイのチュラロンコン大学政治学部を卒業した。大学卒業したての若者の情熱と根拠のない全能感に満ちていた私は、そのまま学部の先生のリサーチ・アシスタントとして一年ほど仕事をし、大学院に進み、タイの政治を変えてやろうと息巻いていた。ところが卒業前に、その先生に「あの話はなかったことになってしまった」と申し訳なさそうに言われた。どうやら、その合同研究プロジェクトの別のメンバーが先にリサーチ・アシスタントを見つけてしまっていたらしい。私の出鼻をくじいた「予定外その 1」だったが、調子に乗っていた若造にはいい薬だったかもしれない。少なくとも今の私はそう思っている。

路頭に迷っていた（というのは流石に冗談だが）私は、大学のサークルの先輩の会社に就職した。業務は保育園の日本人対応窓口と、英語塾の講師である。正直、接客・営業的な仕事など完全にゼロから学ぶものであったし、ましてや幼児の相手など想像したこともなかった。ところがどうして、今の私は子供と遊ぶことが非常に楽しく、有意義なことだと感じるようになっている。最終的にはアカデミアに勝手ながら逃げ帰ってきたが、この「予定外その 2」で経験したことは今の私の大事な一部であると、自信を持って言える。

「予定外その 3」は、東京大学法学部・大学院法学政治学研究科の修士 2 年の時、突然訪れた。当時の指導教員には、博士課程は西洋の大学か、そうでなければ現在在籍している早稲田大学大学院アジア太平洋研究科を考えていると伝えていた。その先生も、最初にお会いした時から「定年退職予定だから、博士課程は面倒を見られないだろう」とおっしゃっていたので、自然な流れの相談だった。そう、これが 2020 年だったことを除いては。あえて言う必要もないだろうが、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大があった年である。

当時私の先生は、「自分の退職後に東南アジア専門の教員が来るかもしれないから、急いで判断しなくてもいい」と言ってくれていたが、大学が閉鎖となるレベルの状況でその見通しはなくなり、他学部に移籍することになった。しかし、当時のアメリカかイギリスに渡航したかったかということ、無論ノーだ、単純に死にたくなかった。というか研究のためにタイに帰国することすらままならない状況だったのだ。今思い返しても、あの 2020 年はなかなかハードスケジュールだった。進学書類の準備をし、そのた

めに家から TOEFL を受け、論文用の資料のためにアジア経済研究所の図書館に通いつめ…。正直もう体験したくはない「予定外その3」である。

最新の「予定外」は、渥美国際交流財団の奨学生になったことに関係している。博士課程を3年で終わられるとは最初から思っていなかったが、実際投稿論文が通らなかったり、自分の研究が上手くまとまらないのはあまり楽しいことではなかった。そんな中、渥美財団奨学金を日本在住の先輩が勧めてくれたので、応募した。正直な話、「支援してもらえたらそれでいい」程度の気持ちだった。

しかし、蓋を開けてみれば、渥美財団の奨学生としての交流は楽しかった。あそこまで多岐にわたる学術研究の話を聞けるのは楽しかった。渥美財団の皆様や奨学生の仲間と真面目な学術的な話であれ酒の席での話であれ、時間を共にするのが楽しかった。完全に「予定外」な出会いであったが、あるいはだからこそ、ここまで楽しかったのかもしれない。この「予定外その4」が無かったら、私の2024年への印象はもっと暗いものであっただろう。

少々散らかった話になってしまったが、結論としては、今の私は色んな「予定外」のおかげでここにいる、と言ったところだろうか。私はまだ博士号を取得出来ていないが（これは明らかに悪い予定外だろう）、この場を借りて多くの方々に深くお礼を申し上げたい。この先も、良くも悪くもいろんな「予定外」を楽しんで人生を歩みたいものである。